

五バツ



2023 秋季号 146

北海道ボランティア・レンジャー協議会

ホームページ



<https://voluran.com/>

目 次

2023年 秋季号 146

巻頭言	「胡」について	副会長 小林英世	.. 1-2
寄稿	「楽しい自然観察」森の新緑観察会	札幌市豊平区 種川真希子 3
〃	前田森林公園自然観察会に参加して	小樽市 美浪 翠 4
〃	三度目は、地元・苫小牧緑ヶ丘自然観察会	苫小牧市 齋藤 尚 5
〃	西岡水源地自然観察会に参加して	石狩市 木村 斉 6
〃	新しい夏 夏の森の観察会	砂川市 三浦 薫 7
〃	苫小牧緑ヶ丘自然観察会に参加して	苫小牧市 相馬範昭 8
投稿	ボラレンの仲間になって	札幌市白石区 飯田康弘 9
〃	表大雪周遊記	「流氷」から転載	清里町 千葉 亮 .. 10-13
〃	初めての大雪山旭岳 山行記	東京都品川区 渡辺健策	.. 14-15
報告	レベルアップ研修会報告 2023.8.6	研修部	.. 16-17
投稿	レベルアップ研修会に参加して	千歳市 川田美沙 18
事務局だより	第2回役員会の概要 2023.8.6	編集部 19
話題提供	「へビ」 2023.6.7 下見会	江別市 成瀬 司	.. 20-21
〃	光合成をやめる進化。2023.8.9 下見会	札幌市厚別区 藤吉 功	.. 22-23
自然観察NOW71	2023.6.8 夏鳥の声に耳をすませて	石狩市 道場 優	.. 24-25
〃	72 2023.8.10 オオウバユリの話	札幌市清田区 春日順雄	.. 26-27
近況コーナー	オオウバユリ、その後のその2	札幌市南区 宮津京子 28
トピックス	新しいお仲間が増えました 育成研修会①	事務局 28
お知らせ	きのご研修会 9/19 に日程変更しました	研修部 28
〃	レベルアップ研修会 期間限定動画配信のご案内	広報部 28
〃	”忘年会” 2023.11.18(土)19:00~開催のご案内	事務局 29
〃	ボラレン・HP「会員コーナー」が充実	広報部 29
〃	「エゾマツ」の原稿募集 次号〆切 11/17	編集部 29
〃	出欠は「調整さん」ソフトのご利用を	事務局 29
	編集後記 奥付	編集部 30

2023 秋「エゾマツ」146号／表紙の写真説明

編集部



今号の表紙は、秋をイメージする昆虫の代表格、「トンボ」です。大形の種、ヤンマ科が人気のようですが、本誌ではモノクロ印刷に適した画像をセレクトし、種名と主に見られる場所を記しました。

撮影時期もフィールドも様々です。

写真／左上から時計回りに、①トンボ科オオシオカラトンボ。池沼や流れの穏やかな小川。②カワトンボ科ニホンカワトンボ。低山地の溪流沿。③トンボ科ノシメトンボ。野幌の森で良く目にします。④トンボ科ヨツボシトンボ。低湿地。⑤イトトンボ科エゾイトトンボ。平地から山地の池沼や湿地。⑥トンボ科カオジロトンボ。山岳部の湿原。

※裏表紙は、ジンチョウゲ科ナニワズ(通称:ナツボウズ)。真夏の林床で真っ赤な果実が目を引きまます。

観察会でオニグルミの解説するときに、プラカードで漢字の「胡桃」の字を示し、なんて読みますか？と質問します。大体の人は読めます。そこで、胡麻、胡瓜、胡弓と書いた紙を見せて、「みんな胡が付いていますよね！」と言います。では「この胡が付いているのはなぜでしょう」と聞きます。「皆さんわかりませんよね」そこで回答、「一般にシルクロードを経て入ってきたものに、この字が付いていますよ」と告げます。そこで「胡」について調べてみました。

胡（こ）音読み、コ、ウ、ゴ、訓読み、いづく（んぞ）、えびす、でたらめ、ながい（き）、なん（ぞ）、みだ（り）、胡は、古代中国の北方・西方民族に対する蔑称「胡瓜」、「胡弓」、「胡姫」のように、これらの異民族由来のものである事を示す用法があり、戦国時代には内モンゴルに居住した異民族をさした。秦（しん）・漢（かん）時代には、主として匈奴（きょうど）を示すようになったが、パミール以西のイラン系の民族、とくにソグド人も胡とよばれ、魏晉（ぎしん）南北朝時代以後はもっぱらソグド人の意味に用いられました。春秋時代から漢代にかけて内モンゴル東部にいた遊牧狩猟民族で、胡（匈奴）の東方に住んでいたことからの呼称といます。モンゴル（またはテュルク）とツングースの雑種であり、秦代になると一時は匈奴を圧倒しましたが、冒頓単于により壊滅させられました。烏桓や鮮卑はその後裔といわれる。

朝鮮語における胡

朝鮮語で、胡（호）には、「中国で夷狄を呼んだ言葉」のほか、「女真族 中国東北蠻人」、「豆満江北部に住んでいた女真族」などの意味があります。また、李氏朝鮮では、清を胡と位置づけて「清（清）」のことを「胡國（胡国）」と呼称し、衛正斥邪の見地から人倫のおよび文化的に夷狄即胡虜視する対清観が一貫して流れていました。この背景には、朱子学の名分論に基づいて明を崇め、清を胡として蔑しめる風潮、中華文明の伝統は清朝によって夷狄化したとして蔑視し、その人びとを「胡虜」か「犬羊」とけなし、中華の正統を継ぐのは朝鮮だけだという唯我独尊的な小中華思想があったそうです。

もともとの意味は、「あごひげ」が長い人である。①えびす。中国の北方・西方に住む異民族。「胡琴」「胡人」②でたらめ。うたがわしいこと。みだり。「胡散」「胡言」③ながいき。老人。④あごひげ。⑤なんぞ。なに。いづくんぞ。疑問・反語を示す助字。

「胡」から始まる言葉

〈胡座〉・〈胡坐〉（あぐら）胡散（ウサン）胡散臭い（ウサンくさい）胡乱（ウロン）〈胡莖菜〉（えぞすみれ）胡（えびす）〈胡瓜〉（きゅうり）〈胡頹子〉（ぐみ）〈胡桃〉（くるみ）胡笳（コカ）胡鬼板（コギいた）胡弓（コキュウ）胡座・胡坐（コザ）胡椒（コショウ）胡漸（コゼン）胡蝶（コチョウ）胡蝶の夢（コチョウのゆめ）胡蝶蘭（コチョウラン）胡狄（コテキ）胡馬北風に△依る（コバホ

クフウによる)胡粉(ゴフン)胡麻(ゴマ)胡麻播り(ゴマすり)胡麻の葉草(ゴマのはぐさ)胡虜(コリョ)胡籙(コロク)胡盧鯛(コロだい)〈胡銅器〉(さはり)〈胡孫眼〉(さるのこしかけ)〈▲胡蝶花〉(しゃが)〈胡蜂〉(すずめばち)胡ぞ(なんぞ)〈胡蘿蔔〉(にんじん)〈胡枝子〉・〈胡枝花〉(はぎ)〈胡籙〉(やなぐい)〈胡蝶樹〉(やぶでまり) 皆さんは読みが無ければどれくらい読めました。

姓

漢字文化圏には古来より「胡」という姓が存在し、靈太后の父胡国珍、北宋の儒者胡安国、中国共産党総書記の胡錦濤、ベトナムの国父ホー・チ・ミン(胡志明)などがいます。

その起源は、華人に同化した異民族出身の者が漢風の姓を付けたのが始まりとも言われるが、通志の氏族略が伝えるところによると、春秋時代の陳の初代君主胡公に由来し、陳の滅亡後に陳の遺民が名乗ったのが始まりと書かれています。

百家姓において、「胡」の姓は十三大姓の一つに数えられています。胡(こ)は、中国の姓の一つ。『百家姓』には158番目に挙げられています。2020年の中華人民共和国の第7回全国人口調査(中国語版)(国勢調査)に基づく姓氏統計によると中国で15番目に多い姓であり、1664.40万人がいます。一方、台湾の2018年の統計では第38位で、128,704人がいる。発音が近い名字と区別するために、「古に月の胡」と呼ぶことが多いそうです。

クルミ(胡桃、山胡桃、呉桃、英語:Walnut、Blackwalnut、学名:Juglans)は、クルミ科クルミ属の落葉高木の総称である。また、その核果の種子(仁)を加工した食用のナッツを指す。木材としては、英語を片仮名読みしてウォールナットとよばれる。原産地はイラン、中国、日本、北米などで、クルミ属の樹木は北半球の温帯地域に広く分布する。樹高は8メートルから20メートルに及ぶ。

日本列島に自生している胡桃の大半はオニグルミ(*Juglans mandshurica* var. *sachalinensis*)であり、核はゴツゴツとして非常に硬く、種子(仁)が取り出し難い。なお、クルミとして食用に利用される種は、クルミ属の植物の一部に過ぎない。実5月から6月にかけて開花し、その後には仮果とよばれる実を付ける。仮果の中に核果が有り、その内側の種子(仁)を食用にする。食材としての旬の時期は、10-12月とされる。食用としての利用は古く、日本では縄文時代から種実の出土事例があり、オニグルミを中心に食料として利用されていたと考えられている。文献資料においては『延喜式』に貢納物の1つとして記されている他にも、『年料別貢雑物』では甲斐国や越前国、加賀国においてクルミの貢納が規定されており、平城京の跡から出土した木簡にもクルミの貢進が記されている。実が食用にされるのはクルミ属の中でも一部の種類だけで、多く出回っているものはカシグルミやシナノグルミである。収穫量はアメリカ合衆国カリフォルニア州と中華人民共和国が多い。日本では長野県東御市がクルミの収穫量日本一である。日本に自生するオニグルミやヒメグルミは実が小さく殻が割りにくいが、古くから食用にされ、クルミ和えや菓子にして食べられている。

札幌市豊平区 種川 真希子

私は東京に仕事で30年近く住んでいたのですが、仕事の縁あって実家のある札幌に戻ってきました。帰札後には北海道の野菜を沢山味わい幸せな日々を過ごし、それなりに満足していたのですが、幼少期に草花と遊んだことを懐かしく思い出し、自然の中で自然と触れ合うアウトドア活動をしてみたい気持ちが湧いてきました。偶然、自然ウォッチングガイドでたくさんの自然観察会があることを知り歓喜したのですが、まだ定年前で仕事をしており、月に数回程度の参加しかできません。週末はどの観察会に行こうかしらと悩むのも毎日の楽しみの一つです。

野幌森林公園の原生林に興味があったことから、5月13日に北海道ボランティア・レンジャー様の春のありがとう観察会に初めて参加しました。驚いたのは、野幌自然林が、自分が育った農村の自然や、山の自然とも違うこと、見たこともないような大木や、倒木がたくさんあることです。自分が勝手に自然だと思い込んでいたものは、人為的に作られたものが大半であるということを知るきっかけとなり、自分は何も自然のことをわかっていなかったのだと悟りました。

ボランティアでガイドをされている方々の知識・教養の深さに感嘆しました。植物の見分け方から、人間の生活・文化とのかかわりなどの知識、自然を守ろうとする姿勢に圧倒されました。一方参加者の自然観察会への積極的な姿勢、自然を愛するゆとりのようなものを感じ、すっかりその日出会った方々の自然に向き合う姿に癒されました。

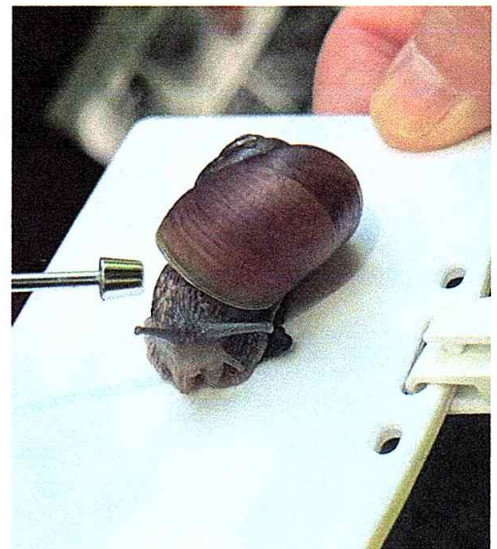
自然観察会後の昼食はこの上なく美味しく感じられます。自然ふれあい交流館で手作り弁当を食べながら、その日撮影した写真を見たり、交流館の図鑑を手にとったり、自然のことをゆっくり学んでゆく時間は至福の時間でもありました。

東京時代は仕事ばかりしていたので、体力が衰えていたのですが、今年から自然観察会でウォーキングをすることで、体の調子が良くなり、仕事でも頑張りがきくなど良いことがありました。

6月8日の森の新緑観察会では、前回に引き続き同じガイドさんで、参加者のほとんどが前回と同じグループの方々だったのですが、今回も多く学びがあり皆さんと楽しく過ごすことができました。前回の観察会から2～3週間しか経過していないのに、自然の様子が変わっていて驚きました。ガイドさんが同じコースでも多くの引き出しがあり今回も学びが多かったです。

ガイドさんの手帳に書かれた虫や花の特徴や識別方法なども見事でした。途中で説明のあったカタツムリが新鮮で不思議に満ちた幼少期の自然との出会いの日々を思い起こさせ、心躍った瞬間でもありました。

まだ自然観察を始めたばかりで右も左もわからないのですが、自然保全の意識は間違いなく観察会で伝わっています。これからも北海道ボランティア・レンジャー協議会様の益々のご発展を祈念しております。



(写真：エゾマイマイ)

ひさびさの青天。天候に恵まれ、手稲にある前田森林公園は広大な敷地を利用し造成され、植栽によって造られており、いかにも石狩平野にあることを体感することが出来る場所に思われます。

様々な樹種を同種ごとにまとめて植えられ、よく管理されています。

ボラレンのHさんのご案内と説明で回りましたが、一つひとつの違いなど、詳しくお教えいただき、分かり易く理解できるようです。

残念ながら、園内の中央部にある「洋風庭園」は、手稲山をバックに、両側にポプラ、シラカンバ、手前両側に長いフジ棚と、花期にはどれほど素晴らしいことか……
来年は、是非もう一度来て見たいと思わせるものです。

自生の木や導入種など、山で見られるもの、街中のもの、モミジバスズカケノキ、シラカンバ、ドロノキ、カツラ、ナナカマド、アズキナシ、ニセアカシア、イヌエンジュ、ニシキギなど、札幌周辺の街路樹として利用されている樹種がほとんど紹介されている様で、貴重な場所と言えるのではないのでしょうか。



中央休憩所のテラスから手稲山、ポプラ並木、水路を臨む

24～25年前に、お友達に誘われ初めて野幌森林公園の観察会に参加して、ガイドさんのお話に植物観察の楽しみをお教えいただき、それ以来今日ほどんな花に会えるのかしらと、小樽近郊に毎週のように出かけましたが、塩谷丸山でたびたび盗掘を目にすることがあり、当時のボラレン支部長の北原さんの声がけで、3名の方と小樽博物館の学芸員・山本先生のご指導で、小樽周辺の植物調査をスタートし、現支部長・北嶋さんも加わり、15～16名にもなり、全域を調査することが出来ました。

しかし当時、クマガイソウなどたしかに現存していたものが、今では確認できなくなり、自然をまだまだ大切にしなければと願わずにはいられません。自然も変化していくのかもしれませんが、一人ひとりが少しずつ気をつかうことで、大切さを理解して自然の素晴らしさを守ることが出来るのではないのでしょうか。

いつの間にか齢を重ね、山行きもあと何回行かれるかしらとおもいつつ、もう少し楽しませてね……と、また山歩きに出かけようと思います。

私は北海道が出身地ですが、進学・就職時期は関東・関西で過ごし、定年後、約4年前(2020年3月)に北海道に戻ってきました。但し、出身地の空知管内と現在の居住地・苫小牧市を比較すると気候も風土も全く違う別の場所です。ちょうどその頃はコロナ対策で、外出が規制され始め、各地のイベントも全て中止となり、北海道の魅力を知りたいという意欲がそぎ落とされ始めた時期でもありました。

しかし、規制下でも自然への思いは持ち続け、ウトナイ湖と北海道大学苫小牧研究林をメインに自然に接し続け、カメラでその瞬間を切り取ってきました。この時期までは、自然の風景をどう写真で表現するかということが主であり、自然を観察するというとは違っておりました。

今年年明けから、あるお誘いから鳥類を含む動植物にも興味を持ち始め、自然の風景とは別に、動植物の新たな写真の領域へ幅を広げ始めました。そして、コロナの規制緩和が始まると同時に、各団体の観察会が一斉に再開され、私自身も色々な観察会に参加させていただくようになりました。

その中で北海道ボランティア・レンジャー協議会(ボラレン)主催の自然観察会が目に入り、地元を知りつくされているガイド(ボランティアレンジャー)の方の説明に聞き入り進んでいきました。今までは風景がメインで、足元の草花・樹木の知識がないことの思いを感じさせられました。野鳥の図鑑、花の図鑑を手に入れ、自然観察会での資料を参考に、帰宅後復習をしておりますが、似た種類が多いため、覚えるには難しいものがあると自覚しております。年齢の関係もあります。また、観察会の記録が写真と共にホームページにアップさせていただいていますので、こちらも参考にさせていただきます。

観察会には、色々な知識をすでにお持ちの方、また年齢層も幅広く参加されており、その質問から新たな発見、新たな情報となっており、有意義と考えております。欲を申せば、配布資料に観察エリアの概略地図を入れ、どの地点でその草花が自生しているのか加えていただければ、私のような知識のまだ少ない参加者にももっと有益な情報となるのではないかと考えました。その分、ガイドの方の負担が増すことには心苦しいものを感じますが。

また、開催時間が10時からの観察会が多く見受けられますが、可能であれば、9時から12時までの3時間で、そして観察路に野鳥も見られる可能性がある経路も含める検討をいただければ、うれしく思います。

参加は今回で三度目、地元会場でした。今後も自然観察会に積極的に参加させて

いただこうと考えておりますので、よろしく願いいたします。 写真：苫小牧・金太郎の池



石狩市 木村 斉

7月8日西岡水源地池の自然観察会に参加してきました。

7月西岡のハイライトはなんと言ってもハリオアマツバメ。管理事務所近くのシャクジョウソウを観てから池のほうに降りて行くと早速ハリオアマツバメが「水飲みパフォーマンス」を披露しています。事前に案内役からハリオの名前の由来は尻尾が針状、オーストラリアから日本まで飛んでくる、日中活動しているときは常に飛び回り水を飲む時も飛んでる、などの解説を受けていたので、目の前に広がる飛込シーンは「バシーッ」という効果音までついて感動的でした。オーストラリアから飛んで来てもお一日中飛び回っているツバメ。一方では、暑いと言っては疲れたと言っては家でゴロゴロしている自身の姿。「人間で良かった」としみじみと感ずることができる西岡水源地7月の水辺です。



感動的なハリオアマツバメの水飲みパフォーマンス

森の中の散策路を抜け木道を歩いているとオオウバユリが一行を迎えてくれました。調査のため前日に現地を訪れていたスタッフが「昨日は咲いていなかった」と驚いていたところを見ると、どうやら私たちの到着を待って私たちのために咲いてくれたようです。これも直前に「西岡では花芽がシカに食べられないように袋をかぶせたり網で囲いをしている」と聞いたばかりだったので、白みがかかった薄黄緑色の光は新鮮でまぶしく、関係者の苦勞が報われたベストの瞬間に立ち会えました。

木道から再び林間の散策路に入ると気になる赤い色が目についたのでスタッフに聞くと、ヤブハギとのこと。地味で目立たない花ですが、濃いピンクの色がさわやかで、ハエドクソウと同じくよ〜くアップで観たらとても面白い表情をしています。

私的には一番の収穫でした。(写真:左上、ヤブハギ)



続いてアクシバ。ボラレンの掲示板で「西岡でも観察できそう」とあったので楽しみにしていた花でした。

実際に会ってみると予想より小さく低い位置に咲いていて、撮影には苦勞しました。葉っぱの陰でひっそりと咲いている可愛い花、こんな花大好きです。(写真:左下、アクシバ)



一人で通れば存在さえ気がつかない、また気がついても名前が分からないことだらけの森歩きですが、観察会では葉や鳥の名前の他にも「自然を維持するための裏方の努力」などいろいろな情報を得ることができます。

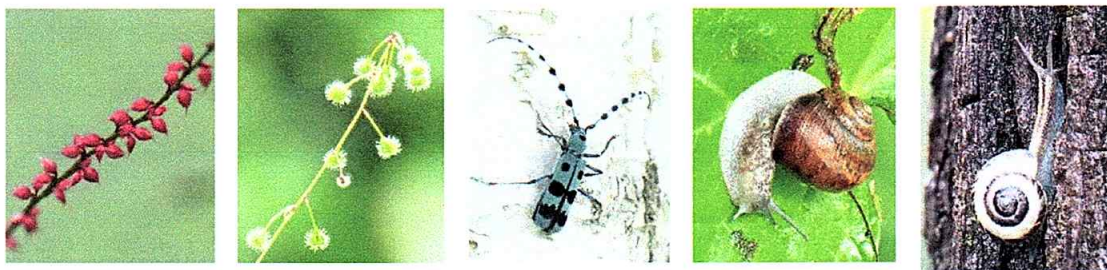
これからも参加したいと思います。よろしくお願ひします。

今年は連日の真夏日で、観察会当日の予想最高気温も 31 度。森の中は涼しいとは言えませんが、木々や湿った土からの匂いがし、暑さまでも心地良く変えました。何よりも自然への興味が暑さを上回りました。夏の濃い緑の中、そこに存在する植物や昆虫はどれも美しく、生命の尊さを感じます。観察会では、名は体を表すミズタマソウ、ミズヒキ、ミミコウモリ、しっとりとした巨大エゾマイマイ、ノースキャロライナの様なサッポロマイマイ、ポップな模様のルリボシカミキリ等々と出会えました。

私が観察会に参加したきっかけは「もう一度好きなことを」と思ったからです。若い頃に自然が好きで自然観察を趣味としていました。しかし、毎日の仕事や生活が忙しくなり、意識の底へと追いやり、いつしか自然は私から一番遠い場所でぼんやりとしか見えなくなっていました。それらを払拭するべく幾つかガイドツアーを探しましたが、思うようなものが見つからず苦戦していた時にこちらの HP にたどり着きました。単発で講義ではなく実際にフィールドに出て実物を観る観察会を希望していました。こちらの観察会は正に探していたものでした。

初回の観察会には意気込んで、少々緊張して参加しました。班編成のようだけど、一緒にメンバーはどんな人達かな？マニアックな人ばかりだについていけるかな？レンジャーさんは優しい人かな？と不安だらけでしたが、心配は無用でした。参加者が 50 人程となり、こんなにも自然に関心のある方々がいるのだと驚きと喜びでした。今回は少人数とはなりましたが、自分にも多少の余裕ができ、昆虫たちのゲストも多く、より楽しく参加ができました。偶然にも 1 回目と同じレンジャーさんと、生物の名前だけではなくライフサイクルや他の生物との関わりなども教えて下さり、広く森を観る楽しみが増えました。一本の植物、一匹の昆虫に、ああでもないこうでもないメンバーやレンジャーさんたちと話が膨らみ、その度に盛り上がる。ああ、これこれ！忘れていたこの感じ！一人でゆっくりと植物を観て歩き、鳥の声に耳を澄まし、清々しい空気を深呼吸するのもいいが、自分だけでは見つけれない野鳥や昆虫、識別できない植物を知る。そして、日常では知り合えないであろう、自然が好きな人達との職業や年齢を超えた会話が観察会の醍醐味で、私にとっては大変貴重なものでした。観察会に参加して、自分が自分に戻るべく向き合うことが出来ました。

このような観察会を企画・実施して下さった方々、多くの知識と経験からの丁寧な説明、下見をして危険のないように気遣いをして下さるレンジャーの方々には大変感謝しております。今年の夏は忘れられない“新しい夏”となりました。ありがとうございます。



写真：左からミズヒキ、ミズタマソウ、ルリボシカミキリ、エゾマイマイ、サッポロマイマイ

今回苫小牧市内から「金太郎の池」と言う事で参加しました。いつもは、近場の散歩を含め、裏山（糸井方面）や錦大沼などを、四季を通して歩くことが多いのですが、野鳥や植物、草花など名前のわからないものが数多く有り、自然観察会などの機会があったならばぜひ参加しようと以前より考えておりました。

今回は、某新聞に載ったのを機会に参加しました。

まず初めに、集合場所の駐車場から踏み出した時から、早速解説が始まりました。虫眼鏡を片手に『ここに花があります。』と言われ、何かと見たところタイルの目地の所に有りました。この花の名前は、トキンソウ（吐金草）と言う植物だそうで、珍しいですね。

次に説明して頂いたのはシダ類です。苫小牧周辺には沢山の草シダがありますが、葉の裏側を見ることはまず稀です（山菜のコゴミは良く食べますがね）。今回は、オシダの胞子嚢（ソーラスという）の説明を受け、その沢山の胞子で増えている事が良くわかりました（ちょっと模様が気持ち悪いです）。

ここには木々も沢山あり、特にドロノキは昔マッチ棒や炭鋏の支えに使っていたみたいです。松ぼっくりのついたクロマツは、手を伸ばして葉の様子を観察。葉が2本ずつ束になる“二葉”



の松であるとの説明に納得です。樹木も奥が深いですね。

外来種植物も数多く見受けられ、オオハンゴソウやアワダチソウの説明があり、私はセイタカアワダチソウだと思っていたものが、葉や茎が無毛でツルツルしているか、毛があってざらつき白っぽく見えるかの違いで、前者のオオアワダチソウだと知り、とても勉強になりました。

芝生の足元では、アリさんが木々の細い枯れた根を通路のように使って盛んに移動していたのには驚きました。

また、池の方には珍しくカワウが姿を見せてくれて見事な潜水でした。



金太郎の池遊歩道は、今回みたいにゆっくりと観察しながら歩くことはあまりないので、大変リフレッシュできました。

又、今回色々説明して頂いた地元在住のボランティアガイド・Tさんの豊富な知識と、どんな質問にも笑顔でわかりやすく話して頂き、時間があつと言う間に過ぎました。有り難うございました。次回、又よろしくお願ひします。写真/上：クロマツの「二葉」を観察、下：カワウの見事な潜水

6月の研修会でお世話になりボラレンの仲間入りをした飯田と申します。

入会して間もないのに投稿してほしいという要請をいただき何を書いているのかわかりませんが、自由気ままにかいてみたいと思います。私は間もなく還暦という年齢ですがボラレンとの関りはつい最近のことです。もともと子どものころから野外活動が好きで、そういう青少年団体に所属していたのもあって、年中キャンプや野遊びに明け暮れ野山を駆け回っていました。大人になってからも指導者の立場で中学生年代の子どもたちと一緒に野山での遊びを楽しんでいました。地元公園での自然観察会などにも参加したことはありましたが、一時、知識欲が盛り上がるものの他のことに気を取られて長くは続きませんでした。今考えてみると昔の私と自然の関わりは「冒険」と「挑戦」であったように思います。木に登って秘密基地をこさえてみたり、崖をロープで懸垂下降してみたり、川につり橋をわたしてみたり、自然とは困難な課題を与えてくれるフィールドであり、チャレンジすべき対象だったのです。

それが最近になって縁があり、活動の拠点を江別市に移すようになりました。活動の内容も幼稚園や小学校低学年の子どもたちが相手になりましたのでおとなしめのプログラムになります。近場の野幌森林公園でプログラムを展開する機会が増えたのですが、この年代の子どもの欲求に応えられるように準備しなければなりません。公園の遊歩道を散策しながら子どもたちの興味を引き付けるように「あれはナンダロウ？これはナンダロウ？」と話しかけます。幼い子がぐずったり飽きたりしないようにあらかじめカードを作って課題に挑戦したりします。そのために下見や準備で何度も公園の中を歩くようになりました。そうして公園をただ散策する機会が増えたことにより、見えてくるもの、聞こえてくるものが今までとは違ってきたのです。今まで聞き流していたであろう美しい野鳥のさえずりを聞いては「ナンダロウ？」、今まで気にもしていなかった道端の小さな花を見つけては「ナンダロウ？」、大きな手のひらのような葉っぱが茂る巨木を見つけては「ナンダロウ？」、年齢のおかげなのか見るもの聞くもの五感で感じるもの全てに「ナンダロウ？」が止まらなくなってしまいました。それからは色々な自然観察会や野鳥観察会に参加するようになったのですが、案内人や世話人の先生方の豊富な知識に大いに感服させられたものです。そんな時に「ボランティア・レンジャー育成研修会」の案内に巡り合ったのです。

研修会で学んだことはたくさんありますが、特に、「木花の名前が判らなくとも自然観察を楽しむことはできる」、「五感を使って自然を楽しむ」の二つが印象に残っています。そして自然解説員として自然を楽しむことを広く多くの人に伝えるために大切なのは「学び続ける」ことです。

早速、7月と8月の観察会に参加してきました。恥ずかしながらも堂々と「自然解説員」の名札を胸に付けながら案内人先輩方の解説に「ハー」とか「ホー」とか感心することしかできませんでした。これからも“ひよっこメンバー”としてできるだけ多くの観察会に参加して案内人としての知識や技能を磨いていきたいと思っています。まずは何よりも自分自身がまわりの人たちと一緒に身近な自然をもっと楽しんで行きたいです。諸先輩方どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

昨年、この「流氷」に、私は「知床半島」縦走記を投稿させて頂きました。自分の足跡をどこかに残したいことも有って、この機関誌で私の活動を報告させて貰いつつ半分私物化しているんです。今年もその続編？と思いつつ読んでいただけると幸いです。

退職の前年に、法師人事務局長に誘われて行った利尻山以来、随分と回数・内容ともに少しずつレベルアップしてきた。時折、札幌の登山の大先輩に同行してもらいつつ、同じ山では更にレベルを上げ、単独行で距離を伸ばしたり、ルートを変えたりして登山を続けて来ている自分が不思議でたまらない。元々、瞬発系の短距離は得意であったものの長距離走は苦手。「何が愉しくて、あれほど苦しい姿で長く走っているのだろう！？」とずっと思っていた一人であって、登山などもってのほかだった。そんな私が、昨年は斜里岳だけで、5.5回（0.5回は、途中の登山道で補修をする為の登山で、登頂には至っていないため）も頂上を目指した。春の練習では西別岳や藻琴山に始まり、斜里岳登山を織り交ぜながら、今年の最終目標は満を持して、表大雪をテントを背負い単独で山泊をしつつ御鉢(カムイミンタラ)を巡って来たのである。そんな自分の進歩と努力を少しだけ褒めたのだった。更に、今年は今通っている職場に「登山部」ならぬ組織を作り、構成員とその家族と共に登山を楽しむことも出来て、収穫の多い一年だった。

話は脱線するが、平成29年度から教育改革と言う名目の中で、市町村が学校運営協議会なるものを設置し、住民が学校運営に参画してもらい地域全体で学校教育を担うシステムを組み込むことが出来るようになった。当町も制度施行開始から一年遅れの、平成30年度に導入し、私は小・中・高校のコミュニティースクール(学校運営協議会)・コーディネーターとして、今年は週2日登校している。更に農水省の農業統計を月2～3日こなしながら農業用ドローンで農薬や肥料の散布とドローン等での映像制作の撮影の仕事をしつつ、合間を縫って登山を楽しんでいる。嬉しいほど忙しい。

そんな理由から、特に7月のスケジュールは過密で、登山を入れると土日祭日が無くなって、現役時代よりハードな時がある。以前もこの機関誌流氷に書いたが、今年も斜里岳の高山植物の植生調査を継続実施していて、時にスケジュールがブッキングしていて冷や汗を掻いてしまう事すらある。

ただ山を眺めているだけでは気が済まない事が幸いし、4年前に煙草を止めても、心配していた様な体重の極端な増加も今の処は無い。それは恐らく、辛くても癒してくれる高山植物たちに会う事を一番の楽しみに、登山に誘われていることに他ならない。

2年前、札幌の友人にお願いし、秋の表大雪を黒岳から北海岳、赤岳経由で銀泉台まで歩いたことがあった。銀泉台の最終バスの時刻が15:30と言う事で、全行程6時間で踏破しなければならず、登山用の体に仕上がっていなかったその時は、口から心臓がはみ出そうな辛い思いで何とか時間内で歩き切った苦い思い出があった。しかし、今回は単独で山泊して、自分ペースで高山植物の写真を撮りながら登りたいと心に決め、今回の計画に至ったのである。

9月23日(金)秋分の日。天候にも恵まれ浮き立つ心を抑えながら早朝自宅を車で出発した。普通の登山好きであれば、目的地にいち早く到着するよう車を走らせるのが普通だが、私には邪な気持ちは有って、途中の川で10月初旬に招集をかけている、フィッシング強化キャンプの釣行河川と

集合場所の下見を兼ねて車を早々に走らせていたのであった。勿論、下見である以上竿を出し、魚の数や反応を確認し、キャンプ場所も確認すると言う任務も負っていた。昔から気になっていた川は、予想以上の魚影と魚種で、キャンプ地としても合格点の手ごたえで層雲峡に向かうことが出来た。

前泊宿は、層雲峡にある元ユースホステルの建物を引き継いで営業している、その名も『層雲峡ホステル』を宿とした。ここは素泊まりが基本、宿泊客の大部分は登山客で、道内外からこのコロナ禍でも多くの方が宿泊していた。今回は宿を予約した際、私はカムイミンタラを一周して山泊後、下山したその足でそのまま長距離運転をして帰宅する気もなく、最初から後泊を予約していた。幸い、個室を確保できゆっくりと疲れを癒すことが出来た。登攀日の朝食はおにぎり弁当をお願いし、下山後の夕食は名物の“黒カレー”を予約して食した。名物にも、稀に美味しいものがあると言う事を知った。美味だった！



「層雲峡ホステル」の裏は夕方になると鹿牧場と化す



層雲峡ビジターセンターで見つけた！

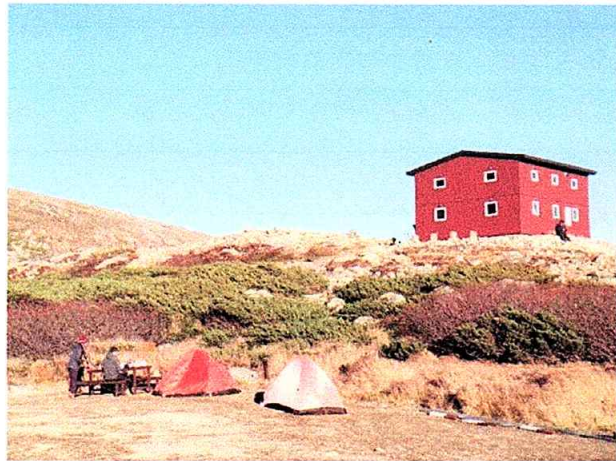
ボランティア・レンジャー育成研修会のチラシ

9月24日(土) 層雲峡ロープウェイとリフトを乗り継ぎ、登山道を40分ほど登り、黒岳に登頂してから前回ルートを途中で外れ、北海岳から白雲岳分岐に至ったところで南に進路を変えた。普通であれば、そこから30分ほどかけて白雲岳に登ってから避難小屋と言う目論見だったが、ソロトレッキングで気が張っていたからか想像以上に疲れを感じ、あえてこの日は登攀せず、白雲岳避難小屋へ進路を変え、余裕を持って小屋からゆったりと景色を楽しめるよう直行することにした。

実は直近の避難小屋情報では、「混雑が予想されるのでグループでの登山客は勿論の事、コロナ禍で人数制限もしているのでテントを必ず持参し、最悪テント泊をお願いする場合がある！」との記載があった。私も老体に鞭打ちテント泊も辞さない覚悟でテントを持参していったが、結果、予想に反し宿泊客は少なく、テント泊に至らず小屋での宿泊が出来た。嬉しいような悲しいような複雑な気持ちだった……。最近の登山用テントは軽量化されているが、それでも1.5kgは有る為、ツェルトで済ませられるなら、それでも良かった。6時間以上余分な荷物を背負い続けるのはしんどい。

一年前にリニューアルされた避難小屋の壁の色は、茶色味がかかった赤色で、濃霧や多少の吹雪でも目立つような色合いになっている。また、管理人が3人在住(男性1、女性2)し、小屋の管理・運営や登山道整備等を担っているという。小屋泊では宿泊料と登山道整備協力金を徴収されるが、本州

の山小屋から見るとありがたいほどの安価である。また、直近の周辺情報や小屋やキャンプ地の使用方法や水源地などを享受してくれ心強かった。SNS 情報や麓の自然センターの情報では、白雲岳周辺で罨の出没情報が有り、ソロテント泊の心細さを抱え登ったが、ここ数日は出没していないとの事で、忠別岳方面からトムラウシ山方面に流れ入る夕日に染まった雲を眺めながら、表大雪の夕日を心置きなく満喫できたのだった。



リニューアルした白雲岳避難小屋、テント泊者も5張り居た



高根ヶ原越しに、夕日に染まるトムラウシ山が遠望できた

本州の山小屋では冬を除くと北海道より営業期間が長く、大多数の山小屋には複数の管理人が居る。北海道は絶対的に開山期間が短く、総体的に登山客数も少ないので管理人が居る山小屋は稀である。管理人が3人も居ると言うのは珍しい。ただ、ここ表大雪の御鉢巡りの出発点黒岳石室にも数名の男性管理人がいる。

避難小屋には小屋毎の独自の約束事が有って、ここでは「9時消灯。朝はトイレ使用時を除き、4時前に準備を含めて小屋内での行動はしない事!!」であった。

私がこの『カムイミントラ』に足を踏み入れたのは今回が2度目で、単独登攀は勿論初めてであった。一度目に訪れたその時から、今度来るときには余力を残し、“神々の遊ぶ庭”の素晴らしい景観に向き合っ、夕日を眺め、さらにモルゲンロートを迎えることが私の夢だった。その贅沢な時間を持てたことは、背負って来たザックの総重量16Kgも相まって、ズッシリと心に残ることとなった。

実際疲れている体で、翌日の事を考えると夜更かしをして夜空を眺める余裕は小屋泊にはない。それより翌日に向け体力を回復することに集中できないと、色々なトラブルに遭遇しそうで心配というのが本音だろうか。

今回の山行では、二階の宿泊スペースに、たった7人と言う山小屋では考えられぬほどの贅沢な空間を確保でき、ゆったりと7時には羽毛の寝袋に潜り込み眠りについたのです。

9月25日(日) 山小屋の朝は何処へ行っても早い。この日も泊り客は決められた約束を守り、4時まで行動制限をしているのが、皆寝袋の中に居るのだがしひしと伝わってくるのである。

解禁となった4時きっかりに一人の人が動き出すと、堰を切ったように皆が朝食や撤収など、それぞれの自身のリズムに従って動き始めるのである。ある人は、寝袋とマットを片付けてから朝食に取り掛かれれば、ある人はまず、やかんにお湯を沸かすことから始める人もいる。千差万別なのである。

前日、私達が眠りに着こうと準備している時間にチェックインしてきた3名が居た。管理人の薦め

もあってか1階に宿泊したのだが、朝食もそこそこに山小屋を出発していった。4時半だった。我々としては迷惑だとは思わなかったが、確かに彼らが到着した時、2階は皆就寝体制にあって、消灯しシーンと静まり返っていた。私以外の人もそうだろうが、管理人と泊り客の会話が自然に耳に入ってきた。「黒岳の石室を何時に出発してきたの!?」「はい、1時半だったと思います。」「うへん、ここに宿泊するのなら、少し出発が遅いですね！」と管理人の若い女性に窘められていた。

この季節は、秋分の日を過ぎたばかりとは言え、日没は思いのほか早い。まして、二千メートルを超える山々の溪谷に建つ山小屋の日没は一段と早い。ヘッドライトを点灯しながら登山道を降りて小屋に向かって来たが、山での過信は事故の始まりとなる、無理はしない方が好いと心で叫んでいた。

避難小屋を6時過ぎに出発した私は、前日残して置いた課題の登攀へと歩みを進めた。友人と来た前は登ることが叶わなかった『白雲岳』の登攀だった。白雲岳は北海道3番目の高峰で2,229mあり、その頂上は噴火口の様相で、そこから望む絶景は後旭岳から北海岳の間にある、荒井岳と松田岳の裾に広がる縞模様の斜面である。長い年月の雨や雪解け水で浸食したそれは、実に綺麗だった。



北海道第3峰から見る最高峰「旭岳」。手前の縞模様が美しい！

中岳からの近景。左の高峰が北海道第2峰「北鎮岳」である。

白雲岳登攀後、登山道は前日踏破してきた北海岳に戻り、再び御鉢巡りの再開となる。昨日ここから眺めた雄大な景色は、呑み込まれそうな絶景だったが、登り返しで眼前に広がるカルデラは雄大で、ここをこれから3/4周しながら、途中で北海道2番目の高峰「北鎮岳」にも登り、最終地点の黒岳を目指すとすると、ここまで来ても「本当に第2峰にも登りたいとしても、この遠路を時計回りに歩み、最後まで進められるの!?大丈夫？」と自問自答したのだった。

周囲には、数人の登山客がいたので、素晴らしい景色を満喫しているふりをしつつ、実は初めての登山道に少し自信を無くしかけていた。また、強い西風はこれから巡る方向では向かい風になり、歩みを進める事を躊躇していたのである。出した結論は、「再度来ても、これ程の晴天の保証もなく、これくらいの風はここでは普通だろうから、再度御鉢巡りの為だけに登る保証も無い。自分を信じ、少し頑張っって時計回りに廻ろう。但し、最高峰の登攀は次年以降の楽しみにしよう！」と自身を納得させていた自分が居た。結果、北鎮岳への登頂も叶い、北海道第2・第3の高峰を登ることが出来た。

この旅で残した課題は最高峰「旭岳」登攀と、何と言ってもカムイミンタラにしか咲かない花たちとの出会いである。咲き誇る高山植物を愛でる旅は来年に持ち越された。ホソバウルップソウ・ヒメイソツツジ・エゾオヤマノエンドウ等々との初対面を絶対に叶えようと、既に登山計画を練っている。

大好きな釣りも同様だが、現場に行っって体験することは勿論楽しいが、場所を探し出発するために計画を練るその時こそが一番楽しいのかも知れない。

東京都品川区 渡辺 健策

2023年8月12日、「山の日」の翌日。札幌の登山仲間と3人で大雪山旭岳に向かった。野幌でボラレンの観察会に参加した翌日に旭川に移動し、郊外の山荘に一泊。翌朝は3時半に起床、車でロープウェイ駅を目指した。途中、深い霧が視界を遮り、この天候では今日はあきらめた方がいいかという思いが一瞬よぎった。しかし、ロープウェイ駅の近くまで来ると、霧はあっという間になくなり、強い日ざしがまぶしいほど。いつの間にか雲海の上に出ていた。

午前6時発のロープウェイに乗り、姿見駅からさっそく登山開始。少し歩くと目の前に、旭岳の大きな姿がそびえていた。池のほとりからは、絶え間なく白い水蒸気が噴出し、温泉のような硫黄臭が登山の意欲をそそる。登山道わきには、花びらを落としたチングルマの穂が朝露に光っていた（写真中央）。



夏真っ盛りの旭岳の登山道は、大勢の登山客で混み合っていた。急峻な登山道をひたすら登り続ける。爽やかな朝の空気を体いっぱい浴びながら、まるで修行僧のように黙々と歩いていく。一步一步踏み出すごとに、行く手の急峻な崖や岩肌が少しずつ近づいてくるように見えるのが楽しい。一息ついて、汗を拭いながら下を振り返ると、さっき通り過ぎた池のほとりのお花畑が緑のじゅうたんのように見える。（写真右上）



登り始めて約1時間。高度が上がるにつれ、登山道わきの花の顔ぶれも変わってきた。岩や石の間から顔を出す高山植物の見事な咲きぶりを見ると、厳しい環境で生き抜く植物のたくましさを感じる。また、岩の表面には、高山特有の湿気のなかで育ったコケの色が映える。緑色のグラデーションは、なんとも言えない自然の造形美だ（写真右上）。

金庫岩を過ぎると、標高の高い山岳ならではの風が吹き始めた。暑さに耐えかねていた身体を冷やしてくれて心地よい。ゴツゴツした岩の多い急な登りを、息を切らせながら何とかやり過すと、突然、奥行きのある広場に出た。ここが山頂か。急峻な道とのたたかいに気を取られているうちに、あっけないフィニッシュだった。

標高 2290m の旭岳山頂からの眺めは雄大だった。周囲には、大雪山系の山々が連なり、トムラウシや十勝連峰に続く稜線が雲の間に見え隠れしている。アイヌの人々が「神々が遊ぶ庭」と呼んだというのがうなずける、まさしく神々しさを感じる山々だ。



旭岳山頂からは、来た道と反対側の裏斜面を下って間宮岳を経由し、裾合平を目指す周回コースへ。混み合っていた往きの登山道に比べ人が少なく、歩きやすい。雪渓から流れる冷たい水や初めて見る高山の花々を満喫しながら、のんびりと歩く。連日 30 度を超える都会の暑さとは別世界の冷涼で爽やかな気候が快適だった。



今回、一番不思議に思ったのが、間宮岳の山頂付近でいくつも目にした、白い骨のような形状の植物（写真右上）。草の間に混じって生えているので、初めは落ちた花びらかと思ったが、よく見ると、白くて長細い、先のとがった茎状のものが多数生えている。ネットで調べると、地衣類の「ムシゴケ」に似ているようにも見える。（どなたかご存じでしょうか？）

行程中に最も感じたのは、昨今の夏の異常な暑さは、確実に高山帯にも及んでいるということだった。標高 2000m 程度を超えると涼しい風が絶えず吹き、下界にはない爽快感を味わえるものの、それより下の大部分のエリアでは、日中絶えず高温が続いていた。この異常な高温は、動植物の生態に影響を及ぼさないのだろうか？北海道大学の研究によれば、今後、温暖化が進むと、高山植物の開花期間が短くなるという予測もあるという。ただでさえ短い夏の限られた期間にしか花を咲かせない高山植物が、その刹那的な開花期をさらに限られることになる、最悪の場合、絶滅のおそれはないのかと気になるところだ。そうした動植物の生態に異変の兆候がないか、注意深く観察していく必要があるのではないだろうか。

灼熱の下界と冷涼な高山帯を行き来しながら、そんなことを思いめぐらせた山行だった。

参考文献：北海道大学プレスリリース「地球温暖化は高山植物の開花シーズンを短縮する」（2019年9月11日）

2023年度
レベルアップ研修会報告

2023年8月6日開催
報告 研修部長 藤田 潔

・初めに

今回のレベルアップ研修会は自然ふれあい交流館において、普及啓発員である小川由真氏を迎え「子供向け観察会」を行う上でのガイド技術の研修となりました。

会長以下19名の参加がありベテランから新人まで、雨の中遠くは清里から来られた会員もいるほどで内容については当日のお楽しみとして開催されました。

・研修内容

スケジュール	9:30	受付開始
	9:45	ガイダンス(※)
	10:00~12:00	実習

※ガイダンス (小川氏)

子供を対象とした対応としてこれまで自然ふれあい交流館は「親子観察会」「森林公園探偵団」「学校の総合学習」を実施してきました。自然に親しんだり興味を持つきっかけ作りです。今回は親子とか子供になりきってという設定はせずに進めたいと思います。

・今日すること

“子供向け観察会”について。自然に親しむきっかけ作り。

・実際に体験

「色いくつ」「音いくつ」…目と耳を使う。

「森のビンゴ」…項目を探しながら自然に目を向ける。

「葉っぱじゃんけん」…自然の楽しみ方、見方。

「目玉っち」自然を見る角度。

・昆虫採集

・実施できた項目 (室内と、雨のすきをついてフィールドへ)

① 無言で誕生日順に並ぶ (テラス)

年長さんから小学生対象。身振り手振りで行う。参加者全員で大成功。

② 色いくつ (テラス)

目に見える景色の色の数を数える。(10~30種類とした人が多かった)

→ヒント：緑や空の色にも濃い、薄いがある。

→ほぼ全員感じる色数が増えた。

③ 音いくつ (テラス)

目をつぶり、聞こえる音の種類を数える。

→人により感じ方が違う。

④ ケースの中身はどんな音 (室内)

中が見えないフィルムケースの中にひまわりの種、どんぐり、クルミが入っていて振った時の音を頼りに同じ音の仲間を探す。

→3種類というヒントで大成功。

⑤ 帽子に写真（室内）

帽子に写真を張り付け、周りの人のヒントで画像の主をあてる。

⑥ 葉っぱじゃんけん（フィールドと室内）

フィールドで各自2枚の葉っぱを持ち寄った後で、司会者が条件を出し、それに最も近い葉っぱの持ち主が他の葉っぱをもらう。

条件：小さい、穴の数、汗拭きに使える。 ※アピールの仕方がポイント。

⑦ 森のビンゴ（フィールド）

まる、しろなどの条件の付いたコマを埋めていく。

※種名にとらわれない。わかりやすい言葉で。知識を詰め込みすぎない。(用語などは子供の感覚で)

・ Q & A

・ Q：“あと何分？”の子供の問いかけにどうこたえるか。

A：興味のあるものを中心に、変更しながら飽きさせない。

・ Q：子供に大人が混じっているときは。

A：基本子供のレベルに合わせる。子供が楽しければ大人も楽しめる。

初心者向けですとっておくのも手。満足度が大事。

あとがき：

今回の研修は日程が決まっているなかでフィールドも使いたいという要望もあり、なかなかセッティングが難しかったのですが、“2つの検討委員会”の中でも未来を担う子供が大事だという話題が出ており交流館館長からも子供向けの観察会対象のカリキュラムがありますよとの申し出があったので研修部に図ったところ賛成の意見もいただき役員会を経て開催の運びとなりました。これまでにないタイプの研修でしたのでかなり不安がありましたがとりあえずやってみました。

蓋を開けてみると先輩諸氏から新入会員迄多数の会員の参加をいただきました。新しい芽が芽生えてきているようです。今回の研修は会員内だけですがユーチューブの配信も準備されているようですので出席できなかった皆様も日々の活動の参考になれば幸いです。 (研修部長)

研修風景↓



投稿 レベルアップ研修会に参加して

千歳市 川田 美沙

8月6日、子供を対象としたガイドングに関するレベルアップ研修に参加した。先日地元の自然観察会に同行し、家族連れの参加者を前に「もしも自分が彼らを案内したら」と想像してみたところ、子供が喜びそうなネタを持ち合わせてないことに気付きハッとした。そのため今回の研修はとても良いタイミングであった。

当日はあいにくの小雨模様だったが、雨天にどう対応するのかと逆に興味が沸いた。

研修では、自然ふれあい交流館の普及啓発員、小川由真様の指導のもと、ゲームを複数実施した。

記憶から落ちているものがあるかもしれないが、その点をご容赦願います。

- ① 【室内】目隠しされたフィルムケースが全員に配られ、振った時の音の違いを聞き分けてグループを作る。参加者同士の距離が縮まり、良いアイスブレイクとなった。
- ② 【テラス】ジェスチャーのみで全員が誕生月日の順に整列する。先頭から日付を発表し、順序よく並んでいることがわかると達成感が得られた。中には同じ誕生日の方もいた。
- ③ 【テラス】各自で見える色を数える。その後、目を閉じて聞こえる音を数える。緑色は濃淡に応じて色数をカウントし、その微妙な色の違いに目を凝らした。
- ④ 【テラス&室内】各自葉っぱを2枚ずつ選んだ後、室内へ。講師がテーマを発表し、最もふさわしい葉をグループ毎に1枚選んで対決する。「一番穴が多い葉っぱ」ではアキタブキの葉の数百の虫食いをチームで協力して数えた。また「汗を拭くのに良い葉っぱ」では、チーム内でお勧めポイントを挙げていき全員の前でそれをプレゼンした。イタドリが若干厚く、表面はふんわりとして触り心地が良いことをこの時初めて知った。



各チーム、冷や汗をかきかき「汗を拭くのに良い葉っぱ」をプレゼン

- ⑤ 【室内】チームの一人が帽子を被り、講師がそこに写真を貼る。帽子の人はチームに戻り、メンバーに質問しながら貼られた写真が何かを当てる。ただし、メンバーは質問に対して「はい」か「いいえ」でしか答えられない。例：動物ですか？ → 虫ですか？ → 目線より上にいますか？ → 家の庭に出ますか？ → 刺しますか？ → 鳥の名前が付きますか？ → スズメバチ

これらを通して、多少の雨でも自然をテーマにしたゲームが可能であること、さらにそこから学びが得られることに気付いた。子供だけでなく、大人にとってもこうしたインタラクティブな活動を取り入れた方が楽しく、記憶に残るように思う。

また、今回の研修を通して会員の方々と交流できたことも収穫であった。ベテランの方々も参加者として一緒にゲームを楽しんでくださったし、1～数年前に入会された方とお話する機会も得られた。可能であれば、SNS や ZOOM を活用した交流や Q & A など、より活発に交流できる環境があればと思う。

最後に、雨が降ったり止んだり不安定な天候の中、臨機応変に研修を実施してくださった小川様とスタッフの皆様、改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

事務局だより

○ 2023(令和5)年度、第2回役員会の報告

とき：2023年8月6日(日)13:00-15:30、ところ：自然ふれあい交流館「レクチャールーム」

出席状況 役員11人中、出席8、欠席3

- ・開 会
- ・会長挨拶 ボラレン改革、出来ることから着実に。
- ・連絡報告事項
 - 1) 事務局 観察会等の会員出席状況 一覧表配布
 - 2) 研修部 宿泊飲食を伴う行事、来年度の復活に向け部内で検討
 - 3) 広報部 レベルアップ研修会の模様→期間限定で会員向けにYou Tube配信予定 SNSの活用、大学等との連携、おまけグッズ・名刺カード(案)など
 - 4) 編集部 会報誌「エゾマツ」夏季号(第146号)の編集状況
レベルアップ研修会の概要(研修部)及び会員向け期間限定YouTube動画(広報部)
 - 5) 二つの検討チーム ZOOM会議。6/3、7/8、8/19、.. 10月まで月一開催。
 - 6) その他 三角山登山観察会 6/30 クマ出没情報で急遽中止に到った経緯を報告
- ・協議事項
 - 1) キノコ研修会開催日の変更 9/20→9/19(火)10:00- 真駒内駅集合、於：桜山
 - 2) レベルアップ研修会 自然ふれあい交流館の協力を感謝→今後の観察会に活かす
 - 3) 今後の観察会等、担当者(当番)の調整

8/9-10(水、木)	夏の森の観察会	春日、藤吉
8/20 (日)	苫小牧緑ヶ丘公園観察会	谷口、藤吉
9/8-9(金、土)	秋の花でにぎわう森を歩こう	小林、藤田 (下見会：藤吉)
9/19 (火)	きのご研修会 [研修部]	松原、加藤 *別途、日程調整し下見
10/4-5(水、木)	秋の森の観察会	吉田(安)、春日
10/15 (日)	晩秋の森観察会	藤田、富山
11/3-4(金、土)	秋のありがとう観察会	春日、小林
1/7 (日)	円山登山観察会	渡辺、藤吉 ※簡易アイゼンの予備携行
3/9-10(土、日)	第2回育成研修会	春日、小林、宮津ほか ☆今後要調整
3/20-21(水、木)	森の中で春をさがそう	吉田(安)、春日

- 4) 会計から、次期定期総会の報告・提案事項(案)について
 - ・年度末におけるボラレン新規入会者の年会費取扱について
3月の育成研修会で入会者があった場合の年会費は、新年度分からとする。
→入会時の徴収額は、入会金1,000円と年会費3,000円(4月新年度分)=4,000円
 - ・主催観察会における一般参加者から徴収する保険料・金額の改定(案)
→2024年度の参加者保険料は、現行の1人当たり@100円から@200円に改定する。
- 5) 役員選考委員会について
 - 2024年度定期総会の役員改選・提案に向けた、選考委員会等の日程(案)について
 - ・11月4日、事業計画会議開催日には、「役員選考委員」を決定(会長権限)
 - ・12月8日、エゾマツ2023冬季号147に「役員改選について」告知記事を掲載
 - ・1月31日、立候補者のメット ~役員選考委員会、2回開催予定
- 6) 来年度事業計画について
 - ・「事業計画会議」(11月4日、三役部長)に向け、役員会で議論した<詳細略>
~主催事業等については、昨年来のボラレンのこれから検討委員会及び二つの検討チームでの議論なども踏まえ、前例踏襲に留まらず、総合的に検討。
~共催観察会等については、自然ふれあい交流館と協議。すり合わせ。
- 7) 忘年会納会の開催について
 - コロナ禍で久しく開催しなかった「忘年会」について、今年度は実施を決定。
開催日時、会場、経費/2023年11月18日(土)19:00~JR札幌駅から徒歩圏内のホテル、参加費@4,000円を目途に調整。追って、ご案内とする。
- ・閉 会

概略以上 編集部

1・アオダイショウとは、どんなへび

北海道のアオダイショウは、エゾブルー・エゾグリーンと呼ばれるほど、青みが強い個体が多く、特に美しいので爬虫類愛好家の中で人気があります。

日本の固有種で、体色が青色を帯びていることから青大将と呼ばれます。全長が100～200cm、太さは3～3.5cmですが、全長の平均はオスが大きい。大型の個体はメスの方が多い。

頭部は角張って、やや平ぺったい、目の後ろに黒い縞筋が入り、瞳孔は円形で黒目をしています。体列鱗数は23列、もしくは25列、腹板は221～245枚。

幼体と成体で模様が異なります。成体は背中に4本の不明瞭な黒褐色の縦縞が入りますが、縦縞が不明瞭であったり無いこともあります。

幼体には、はしご状の模様（銭形紋とも呼ばれる円形が連続した模様とも言われています）があり、マムシと間違いやすいです。

2・アオダイショウの生態

(1) 生活と行動

平地から山地にかけての森林に生息、半樹上生のへびで餌であるネズミの生息環境に対応し、へびは人家の周辺でよく見られ、人と共に暮らしているとも言われます。昔は農家の財産である米をネズミから守ってくれた「家の守り神」と大切にされました。

昼行性で、人間の活動時間と重なることの多く、人を恐れません。夜は岩の隙間、地面に空いた穴の中で休んでいます。北部に生息する個体は冬眠します。地下2mで、11月から翌年4月まで、6ヶ月間と冬眠期間は長い。

5～6月が交尾期間、7～8月産卵期間、卵の数は4～17個（卵は45～65日程で孵化する）、9月新生蛇誕生（生まれたばかりの子へびは全長35～40cm）。一般的に温和な性格で、噛みつくことは少なく、基本的には攻撃的な性格ではない。危険を感じたり、威嚇の際は尾を辺りに打ちつけて独特の青臭い匂いを放ちます（悪臭や異臭）。アオダイショウが他のへびに比べ最も臭いと言われています。この匂いの原因は、尾のつけ根部分にある肛門（総排泄孔）体近の匂線から出る褐色の液体です。

腹板の両端に小さいキール（側積）があるため、このキールを引っ搔けて木の枝や幹、時には壁面を登ることができます。木に上がる時は、体を木に巻きつけて、上がって行くのではなく腹板のキールを引っ搔けて登るためです。

(2) 捕食行動

アオダイショウは、木や壁を真っ直ぐ上に登ることが出来、鳥のヒナや卵を狙って巣を襲う。小型の哺乳類や両生類を食べる。大型の獲物に対しては、体を巻きつけて殺して、頭から呑み込みます。

食道にあたる背骨の下に鎌状の突起が見られ、飲み込んだ卵の殻を割るのに使用され、その後殻だけ吐き出すこともできます。

索餌行動 ①餌を求めてひたすら探し回る「探索型」（アオダイショウ）

索餌行動 ②餌が現れるのを待つ「待ち伏せ型」（マムシ）

餌処理行動 ①毒を使う（マムシ、ハブ）

餌処理行動 ②巻きつくなどして餌の動きを封じる（アオダイショウ、シマヘビ）

餌処理行動 ③ただ呑み込むだけ（アオダイショウ）

（3）脱皮と寿命

年に数回脱皮する。脱皮する2～3週間前に皮膚のつやがなくなり、黒ずみ、目は白く濁る。この時は、目はほとんど見えない。脱皮の数日前になると目はくすんでくる。脱皮直前には、よくはいまわり、口元をこすりつける。抜け殻は裏返しになっている。

寿命は15～最長25年程度とされています。

3・人間との関わり

（1）日本ではヘビの抜け殻は縁起物

七福神の紅一点、弁財天は金運や財産運の守護神とされています。

その弁財天の使者がヘビなのです。ヘビは脱皮を繰り返し成長していきます。商売では困難な状況を乗り越えることで、どんどん発展していきます。ヘビの脱皮に似ていることから、縁起物として考えられるようになりました。

昔は今以上に米は大切な食べ物でした。お金に換算されるくらい重要な存在だったのです。その米を勝手に食べてしまうネズミで、ネズミによる被害は大変大きかった。

ネズミの天敵がヘビで、米を守ってくれる存在のヘビ。ヘビの抜け殻は財産運を上昇させ家が傾かないように守ってくれる縁起物と考えられた。長いヘビの抜け殻を手に入れた場合、小さく切ってあちこち忍ばせておくという扱いは良くありません。切った場合「縁を切る」につながり、ご利益は頂けなくなってしまいます。

抜け殻を包む場合、黄色い布で包むと更にご利益が頂けます。黄色は風水でも金運と財産運にとっても強い色です。

（2）メキシコ合衆国の国旗にヘビが

紋章は「ワシがヘビを啜って湖沼のほとりのサボテンに止まっているのを見たら、そこに都を築け」というアステカ伝説に由来します。

メキシコではサボテンの切り口で畳や衣服の汚れをふき取り、樹皮をシャボン（石鹼）として使っていました。日本語でサボテンというのは「石鹼の代わり」という意味で用いられた言葉がもとだとする説が有力です。

（3）ヘビにまつわることわざ

- ・「蛇に睨まれた蛙」（恐ろしいものや、強いものを前にして怖くて体が動かないこと）
- ・「蛇（じゃ）の道は蛇（へび）」（同じ仲間どうしは、互いに相手のすることが分かっていること）
- ・「蛇の生殺し」（物事をどっちつかずの状態のままにしておくこと）
- ・「鬼が出る蛇が出るか」（これからどうなるか予想がつかない）

参考文献 「日本の両生爬虫類」平凡社、「日本動物大百科5両性類、爬虫類、軟骨類」平凡社、「学習百科図鑑 両性・はちゅう類」小学館

HPの掲示板にツチアケビやオニノヤガラ、シヤクジョウソウなどを紹介する過程で気になったことをテーマに取り組んでみました。まだ、不勉強な点が多く、どうぞご教示ください。

○光合成をやめる進化・葉緑素を持たない植物たち

植物の中には、葉緑素を持たず光合成をしない種が存在する。いわば、光合成をやめる進化。これらの植物が、生育に必要な炭素化合物を獲得する方法は、菌根共生による菌従属栄養と寄生に大別される。

従前は、有機物を分解して炭素化合物を吸収しているもの・「腐生植物」とされてきた。

しかし、菌根共生に関する研究がすすみ、このような植物は腐生ではなく菌根菌から炭素化合物を獲得していることが明らかになり、「菌従属栄養植物」という言葉が用いられるようになった。(1994年、英国のジョナサン・リーク発表の総説～ mycoheterotrophic plants なる用語を和訳)

キジカクシ目	ラン科	ツチアケビ属	ツチアケビ	①	菌根共生	
		オニノヤガラ属	オニノヤガラ	②		ナラタケ菌
		サカネラン属	エゾサカネラン	③		及び
ツツジ目	ツツジ科	シヤクジョウソウ属	シヤクジョウソウ	④	キシメジ属	
			アキノギンリョウソウ	⑤	ベニタケ属	
		ギンリョウソウ属	ギンリョウソウ	⑥		
シソ目	ハマウツボ科	キヨスマウツボ属	キヨスマウツボ	⑦	寄生根	

★「菌根」=カビやキノコの菌糸(菌根菌)から養分を奪い、自分の栄養にする能力のある根。

①=団子をつなぎ合わせたようにでこぼこ四方に広がる塊茎で、ナラタケ菌に共生。

②=ごろんとした大きな塊茎。ナラタケ菌から栄養を受け取る。種子発芽時には腐生菌のクヌギタケ属と共生。(ヌスビトノアシ「盗人の足」と呼ばれ、鎮痛などの漢方薬に。)

③=根茎は地中に直立し、先が上を向く根を多数束生する。

④、⑤、⑥=内生菌根の一つ、モノトロポイド菌根というサンゴ状の根を形成し、キシメジ属やベニタケ属、マツタケ属などの外生菌根(根の表面を覆う菌、養分を吸収すると同時に土中から吸収した水分やチッソ、リンサンなどを供給する)の、ある特定グループを分解・消費している。

☆「寄生根」=光合成植物に寄生して炭素化合物などの栄養分を吸収する特殊化した根。

⑦=アジサイ科などの植物の根に寄生する。

※種子とその散布

・これらの植物の種子は、顕微鏡で見ないと分からないくらい極小。ラン科の植物も、極小のホコリ状の種子を風まかせで散布。発芽や成長にあたっては、特定のグループの菌類を消化して栄養源とし、それを資本に発芽・成長していく。成功確率は、当然低いから低コストで莫大な数の微少な種子を風に乗せて分散させる戦略。

・ツチアケビは、ランとしても異例なことに、自動自家受粉で結実する一方、真っ赤で多肉質の液果はヒヨドリなどにより種子散布。(2015. 05. 12、京都大学・研究G)

・ギンリョウソウの種子は、カマドウマ類やモリチャバネゴキブリ(道内×)などが運び手?

キヨスマウツボの種子は、カマドウマ類が散布に貢献(2017. 11. 13、神戸大学・理学研究科)。

ひと言

・液果と蒴果。ギンリョウソウは液果。アキノギンリョウソウは蒴果で上向きになる。

～雌しべのふちは、ギンリョウソウが紫系に対し、アキノギンリョウソウは黄褐色。

・ギンリョウソウは、傷ついたり乾燥すると、フェノール性化合物の強力な酸化反応のため、真っ黒くなる。シヤクジョウソウも、黒く変色して翌年までその姿をとどめている。

・アキノギンリョウソウは、別名：ギンリョウソウモドキとも呼ばれるが、個人的には残念。

※「部分的菌従属栄養植物」

イチヤクソウ類は、自らの葉での光合成と菌根菌からの栄養の両方に依存する。なかでも、ヒトツバイチヤクソウは葉が1～2枚と極端に少なく、より菌従属栄養植物に近いそうです。



★ シャクジョウソウ (黒ノ越冬個体)



★ ギンリョウソウ



★ アキノギンリョウソウ



☆ キヨスミツボ <寄生植物>



同上：果実は液果



同上：果実は蒴果 (越冬個体)



★ ツチアケビ



同左：果実(液果)



★ エゾサカネラン



★ オニノヤガラ



★ シャクジョウソウ 蒴果



※ ヒトツバイチャクソウ



* ジンヨウイチヤクソウ



* ウメガサソウ

凡例；★菌従属栄養植物、☆寄生植物、※部分的菌従属栄養植物～*光合成と菌従属栄養の“二刀流”。

- 参考資料等
- 『菌根の世界』菌と植物のきってもきれない関係 齋藤雅典編著 築地書館 2020.9.10
 - 『驚きの菌ワールド』菌類の知られざる世界 日本菌学会編 東海大学出版部 2017.2.28
 - 『森を食べる植物』腐生植物の知られざる世界 塚谷裕一著 岩波書店 2016.5.12 ほか

自然観察 NOW

NO. 71

野幌森林公園自然情報

発行：2023年6月8日

北海道ボランティア・レンジャー協議会

ホームページ <https://voluran.com/>



今年の野幌の森の春は急ぎ足で、早春と春の盛りの花々が入り乱れて咲いていました。エゾエンゴサクのそばに、ミヤマエンレイソウとオオバナノエンレイソウが、同時に咲いているという具合でした。近年大人気の、亜種シマエナガを見たいと、たくさんの鳥好きが集まっていました。それが今は、6月初夏を告げるカッコウの声や、たくさんの夏鳥たちのさえずりが、爽やかな野幌の森に響いています。そして、エゾハルゼミの合唱の中に、花たちは夏の次の花へと交代をし始めています。今日は、次第に色濃くなっていく木々の森の中を歩いて、初夏の花々を見つめ、初夏の野鳥のさえずりの声に耳をすまして、野鳥の声を楽しんでみませんか。

野幌の森に響く、夏鳥の声に耳をすませてみよう！！

○ キビタキ（黄鶺鴒） スズメ目 ヒタキ科

美しい色彩と美声を持つ鳥。森の”ピッコロ奏者”と呼ばれるほど、素敵な声で鳴く。

（分布） 北海道全域で夏鳥。本州から沖縄でも夏鳥。 北海道は生息密度が高い。

繁殖地は、日本列島とサハリンの他は、大陸にわずかに点在するのみ。日本特産に準じる繁殖分布。

（学名） *Ficedula narcissina* は、「水仙のような色のイチジクを好む」という意味。

（英語名） Narcissus Flycatcher 「narcissus(ナルシス)」は、黄水仙の意味。ナルシスは、ギリシア神話で水辺に移る自分の姿に見とれているうち、水仙になってしまったという美少年の名前。

「flycatcher(フライキャッチャー)」は、ヒタキ類の総称で、飛びながら虫を捕まえる習性を表している。

（中国名） 水仙花鶺鴒

（名前の由来） 火打ち石を打っているような「カッカ」

と言う鳴き声から「火焚き」となり、「黄色いヒタキ」。

【姿・色】 雌雄異色。夏冬同色。雄は頭から上面が黒く、眉斑と喉から胸、腰が黄色い。喉の黄色には橙色みがある個体が多い。翼には白斑がある。雌は全体的に褐色で目立たない。

【生態】 平地から広葉森林で繁殖する。明るい林を好む。

樹洞や樹木の裂け目などに営巣する。食性は、動物食の強い雑食。昆虫や節足動物などを捕食することが多く、秋に

は、木の実も好む。浮遊昆虫を見つけると、飛びながらとらえる。これを「フライキャッチ」と呼ぶ。

雄同士のなわばり争いでは、スズメバチのようにブーンという羽音のような声を出して、嘴をパチパチ鳴らして追い回す。地上に落下してもみ合いもする。

【鳴き声】 「さえずり」は、ピッコロロ、ツクツクチィ、チーチョホイ、チーチョホイ。“地鳴き”は、ビッ、ビッ。ブーンなどと鳴く。繁殖期の雄は美声で複雑にさえずる。



※ 「夏鳥」とは、繁殖するために日本やってくる渡り鳥のこと。春に渡って来て夏を過ごし、秋南方へ渡って越冬する鳥のこと。ちなみに「冬鳥」とは、越冬するために日本にやってくる渡り鳥のこと。秋に渡って来て冬を過ごし、春に北方へ渡って繁殖する鳥のことをいう。春、野幌の森にやって来る鳥は「夏鳥」。

○ クロツグミ (黒鶇) スズメ目 ヒタキ科

古くから美声の鳥で有名。夏の朝のコーラスの主演。初夏の”フルート奏者”と呼ばれる。ソロ演奏の複雑な音色の他、時々、他の鳥のまねを入れて鳴く。

(分布) 北海道全域で夏鳥。本州から九州でも夏鳥。

世界的には、中国で繁殖するだけで分布は狭い。

(学名) *Turdus cardis*は、

「アザミのようはツグミ類」という意味。

(英語名) Japanese Thrush は、「日本のツグミ」

という意味。

(中国名) 烏灰鶇 (アイヌ語名) イタカチャ (ものいう・小父)

【姿・色】雌雄異色。夏冬同色。雄は頭から上面と、胸が黒い。胸から下面は白く、脇腹に黒斑がある。嘴とアイリングは黄色。雌は頭から上面は黒みがかかった茶褐色。下面は白く、黒斑がある。胸から脇が橙色。

【生態】平地から山地の森林で繁殖する。明るい広葉樹林に多い。食性は動物食で、ミミズや昆虫、果実も好む。主に日本の山地で子育てをする。雌もさえずることがある。“さえずり”は、全国の地域によりさまざまである。

【鳴き声】“さえずり”は、キョロイ、キー、キョコキョコキョコなど大きい声で複雑に鳴く。バリエーションも豊富。“地鳴き”は、キョキョキョ。ツイーなどと鳴く。

【婚姻関係】繁殖については、木の枝の上にコケ類や枯れ枝、土を使って椀状の巣を作る。3個から4個の卵を産む。抱卵日数は12日から13日。14日程で雛は巣立つ。産卵交代をオスとメスが共同で行う。毎年同じ場所で繁殖しないようである。



☆ 野鳥、一口メモ ～日本の野鳥の世界的分布を知ろう！(その1)～

よく、「なあんだ！ヒヨドリか！」「また、ヤマガラが鳴いているよ！」など、鳥に大変失礼な言葉を発する人が、しばしばみられます。

ところが、外国人が、日本でヒヨドリを観ると、「ヒヨドリ！オー、ワンダフル！！」と、感嘆の声。我々日本人は、何で？と思います。実は、ヒヨドリは、ヨーロッパにもアメリカにもいないのです。野鳥の世界的な分布については、意外に知らないで、野鳥を見ている人の多いこと。

例えば、ヒヨドリは、日本全域の他、サハリン、朝鮮半島南部、台湾、中国南部、フィリピンの一部の極めて狭い地域にしか分布していません。

日本の野鳥の中には、日本しかいない鳥の他、世界の限られた地域にしかいない鳥が、意外にいるのです。鳥の名前を知るだけで終わらず、鳥の生態や分布などを知ると、野鳥への親しみが倍増します。鳥のことを、もっと勉強しませんか！

(主な参考文献) ・『北海道野鳥図鑑』(亜璃西社) ・『北海道野鳥ハンディガイド』(北海道新聞社) ・『フィールド図鑑 日本の野鳥』(第2版) (文一総合出版) 他

★6月の観察会の予定

- ☆「前田森林公園自然観察会」6月11日(日) 10:00～12:00 (集合: 前田森林公園新川駐車場)
- ☆「苫小牧緑ヶ丘公園観察会」6月18日(日) 10:00～12:00 (集合: 金太郎の池駐車場)
- ☆「三角山登山観察会」6月30日(金) 9:00～12:00 (集合: 山の手(緑化会前) 登山口)

文責: 道場 優 (どうじょう まさる)

自然観察 NOW

NO. 72

野幌森林公園自然情報

発行：2023年8月10日

北海道ボランティア・レンジャー協議会

ホームページ <https://voluran.com/>



オウバユリの話

花が咲くまで10年前後



左の写真は、来年あたり花を咲かせそうな株とその周囲です。発芽して3年目ほどと思われる長楕円形の1枚時代のオオウバユリが見られます。春先、地面をじっくり見ると楽しい発見があります。単子葉類は一枚葉。双子葉類は双葉。ゆっくりとおおらかに名前前は分からなくてもいい。生命の息吹の様子を感じ取りましょう。

7月上旬から中旬にかけて、野幌森林公園にはオオウバユリの花が咲きます。

発芽した1年目は、細長い葉が1枚。周囲に沢山の草が生えますから、根にチョッピリの養分を貯められるだけです。この様に少しずつ養分を蓄えながら1枚葉の時を数年過ごします。葉の形も細長い形から幅広の長楕円形に変化していきます。

葉の枚数は年を経るごとに増えていきます。枚数が5～7枚になると翌年、開花します。



夏の草はらでひときわ目をひくオオウバユリ

◆花茎が高いと受粉に有利です

夏草茂る原っぱの中に埋もれては種子を育てることが出来ません。原っぱを抜きんでる高さに花茎を伸ばし、花を咲かせ、昆虫を呼び寄せ、種子を育てます。

◆右の写真は、今年の7月29日に撮影しました。横向きに咲いていた花ですが、果実(※注1)は、上を向きます。早くも、風の力を借りて種子散布の準備を始めています。

◆オオウバユリの一つの果実には、600個ほどの種子を实らせませす。果実10個で6千個、20個だと1万2千個もの、大量の種子を实らせませす。

※注1：オオウバユリの場合「さく果」、熟すると果皮が裂開して種子を散布するもの



風の力を借りて種子を運ぶ

右の写真は、9月上旬の撮影。オオウバユリは他の草たちから抜きんでて高いです。風の力を借りる姿です。



種子は翼を持っています。極めて軽いです。息を吹きかけると舞い上がります。風で運ばれるように進化

して来たんですね。自然の巧みさを感じます。



左の写真は、11月上旬に撮影しました。果実は既に開いています。櫛の歯状のもので種子がこぼれないようになっています。強い風が横から当たると突き当たって上向きの風になります。種子は噴水のように吹き上がります。そして、風に乗って旅立ちます。

花が横向きに咲いて、果実が上向きになって、開いてもこぼれ落ちないように櫛の歯状のものがある。そして、強い風の日の到来を待つ。オオウバユリの巧みな生き残り戦術です。

オオウバユリは1回繁殖型の生活史

春、発芽して、花を咲かせ種子を作り一生を終える一年草の草花は「1回繁殖型」の生活史を持ちます。

ところが、宿根草のオオウバユリも「1回繁殖型」です。発芽してから10年前後の年月をかけて花を咲かせ種子を実らせて、その生涯を閉じます。根に貯めた養分も全部使い果たしてしまいます。

オオウバユリの娘鱗茎

右の写真は、2012年11月10日撮影です。強い台風で草木が沢山倒れました。オオウバユリも根こそぎ倒れているものが多かったです。その倒れた根に娘鱗茎を見ることが出来ました。オオウバユリは種子を作って命を引き継ぐほかに、娘鱗茎を作って子孫へと命を引き継いでいます。



オオウバユリの娘鱗茎

観察会案内

- 9月9日(土) 秋の花でにぎわう森を歩こう 集合9:50 10:00~11:30 自然ふれあい交流館集合
- 10月5日(木) 秋のありがとう観察会 集合9:50 10:00~11:30 自然ふれあい交流館集合
- 10月15日(日) 晩秋の森観察会 10:00~12:00 野幌森林公園大沢口(駐車場)集合

参考とした文献等 ○「おもしろい草花の話」(北海道林業改良普及協会)、○『植物生活史図鑑』(北海道大学出版会)、○[手稲アウトドア・クラブ] 代表: 皆川國男氏のメール配信による自然情報

(文責: 春日 順雄)

--- **近況コーナー** ---

▷ オオウバユリ、その後のその2 (2023. 8. 14)

エゾマツ139号に、生協の共同購入カタログに載っていたオオウバユリの球根を2個購入し植えたことを。エゾマツ142号に、そのうちの1株がイレギュラーな形ながらも咲いたことを報告しました。で、今年、もう1株は葉を7枚広げていたのですが、現在花芽が出ることも無く枯れはじめています。3年目の夏を待つことになりました。(札幌市南区 宮津 京子)

--- **トピックス** ---

☆ **新しいお仲間が増えました** 2023. 6. 24-25 於 ; 自然ふれあい交流館 / 受講者10名
今年度第1回目の「ボランティア・レンジャー育成研修会」修了者から、次の3氏をお仲間にお迎えすることができました。新しいお仲間が増え、大歓迎です。

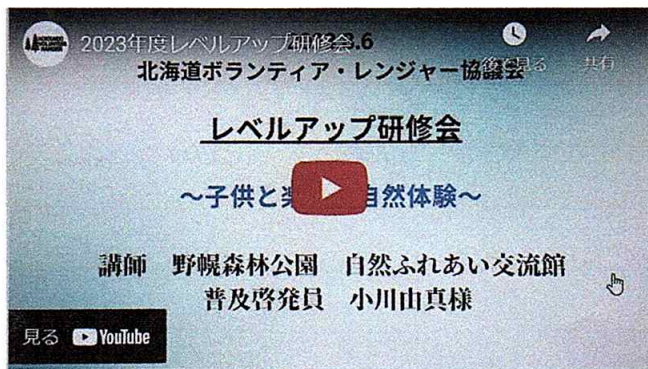


—新規入会者—
・飯田 康弘さん 札幌市白石区
・橋詰多恵子さん 札幌市厚別区
・川田 美沙さん 千歳市
飯田さん、川田さんには本号に投稿を、橋詰さんには、昨秋観察会参加者として既刊の143号に寄稿をいただきました。
←写真：今年度1回目の育成研修会から

** **お知らせ** *****


☎ **きのこ研修会** 日程変更しました。 変更後 9/19(火)10:00-12:00 ← ~~年間計画 9/20(水)~~
9月19日 (火)、地下鉄真駒内駅前集合～桜山界限「きのこ研修会」～地下鉄駅前解散

📺 **レベルアップ研修会 期間&ボラレン会員限定 ”動画配信” のご案内**
当会の年間行事である「レベルアップ研修会」が去る8月6日開催されました。
概要等は、16-17ページに研修部報告。18ページには投稿記事があります。ご参照ください。
参加いただけなかった会員の皆さまにも研修会の模様を動画配信 (Youtube) にてお届けし、活動の参考にしていただければ幸いです。なお、研修会は、自然ふれあい交流館の皆さま及び講師の普及啓発員・小川由真様のご理解、ご協力のもと実施したのもです。



タイトル ~子供と楽しむ自然体験~
公開期間 2023. 9. 1~12. 31 期間限定
YouTubeアドレス (会員限定)

https://youtu.be/54pUjkiY_o

←ボラレンHP <https://voluran.com/> の「会員コーナー」にリンクを掲載しています。画面、 をポチッと視聴可!

[ご注意]・会員以外への公開はしない。・録画等もしない。
・通信費が発生する可能性があります。スマートフォンやタブレットによる視聴は、パケット通信料定額制の加入契約をしていない場合、通信事業者から高額な料金を請求される場合がありますので、特にご注意ください。

右のQRコードからもアクセス可能です。→



㊦ 久々、”忘年会”を開催します。ボラレン：この一年と明日、未来を語りましょう。

と き 2023年11月18日(土) 19:00-21:00
 ところ 札幌市中央区北2西3 富国生命越山ビル2F
 「生ソーセージバル」レッカー LECKER
 札幌フコク生命ビル店 地下歩行空間直結
 かいひ @4, 000円 当日、会場にて申し受けます。
 申込み 10月18日(水) までに お願いします。
 ネット環境の方は調整さんへの入力or公式
 メール、または、担当幹事へ電話で承ります。
 →ボラレン公式メール contact@voluran.com 担当幹事・藤吉:携帯 090-9756-2089



店舗入口の様子 (内部は、洋風・椅子席)

- ㊦ ボラレン・ホームページ「会員コーナー」が充実してきました。(パスワード volu)
- ・ 新聞取材記事のご紹介 2023. 8. 20 苫小牧緑ヶ丘公園自然観察会 道新、苫民で記事に
 - ・ 会員向け。期間限定公開「レベルアップ研修会」動画 ~本誌、28頁に詳報
 - ・ 会報誌「エゾマツ」のバクナンバー 創刊号から最新刊まで、カラーで収録・掲載。
 - ・ ボラレンの「会則」
 - ・ 当会発行ハンドブック類 各号の全データを収録・掲載。



← 歴代、ボラレンの刊行物(左から)

- 1997. 5. 1 自然観察ガイドブック
 - 2007. 12. 12 自然観察ハンドブック
 - 2016. 3. 25 自然観察ハンドブック II
- 先達の手によるオリジナル座右の書
 それぞれのデータ、ダウンロード可
 内容的には全く色褪せていません!!

- ・ 無料Web会議 JITIS Meet のご案内 本誌、編集会議でも活用中
- ・ 広報資料室 パソコン、スマホ用壁紙 春夏秋冬素材
- ・ SNS展開準備中
 ~Youtubeチャンネル(試験運用中)、Instagram(試験運用中)、FaceBook(準備中)
- ・ 宣伝用カード(名刺サイズ)のご案内・・・名前自署タイプを試みに、5枚ずつ同封します。



(表面)

(裏面)

← 宣伝用カード(名刺サイズ)
 ボラレンの公式メールアドレス
contact@voluran.com を設定。

名前自署タイプと名前PC入力タイプ
 2つの利用ガイドを掲載しています。

- ㊦ 「エゾマツ」2023冬季号 147 の原稿を寄せてください。
 次号は、12月8日(金)発行予定。〆切は、11月17日(金)です。
 奮ってご投稿くださるよう、お待ちしております。
 ハガキ程度の短信「近況コーナー」をはじめ、A4版1~4ページ程度の「投稿欄」まで。
 書式設定は、天地左右の余白を23~25mm確保してください。狭すぎると印刷製本に支障がー。
 使用文字フォントは、明朝体を基本に、本文10.5p、40字詰め×40行 ±α お願いします。
 カラー印刷・本誌中央の見開き面、に掲載する写真付き投稿も大歓迎です。

- ㊦ 「調整さん」ソフトで行事の参加表明を メール環境の皆さまへ
 自然観察会をはじめ、ボラレン行事への出・欠は、調整さんソフトで随時の入力、意思表示を。



ジンチョウゲ科ナニワズ(別名：ナツボウズ)の果実 と ボラレン・エンブレム

編 集 後 記

- 観察会のお客様から素敵なお寄稿をいただき、誌面に光彩を添えることができました。会員の皆さまからは、新入会員をはじめ、大雪山の話題が2件のほか近況コーナーにはオオウバユリのその後・・・の興味深い話題など、ご協力に感謝します。
- 昨年度の「ボラレンのこれから検討委員会」報告に引き続く「2つの検討チーム」で議論が続く中、いち早く形となった取組の一端をお知らせすることができました。
- 次号も、皆さまからの話題で誌面が一層充実しますよう、よろしくお願いいたします。

→2023冬季号は、12月8日(金)印刷発行予定。「投稿」の〆切は、11月17日です。

- ・暑さにポーッとしつつ(映画は観てないけど)「(君たち)私は?どう生きるか?」を思い暮らす今夏でした。 K/M
- ・暑かった夏、我が家ではスイカを5個消費しました。食べた直後は、身体がひんやり・・・ウリ科パワー、実感です!! K/Y
- ・今年の夏は、観測史上最高と聞きました。かつて、仕事(神奈川県2年滞在)で猛暑日の屋外作業で汗を滝のように流していた経験が・・・やはり、北海道は天国です。 Y/Y
- ・半端ない暑～い夏から、爽やかな季節の到来も、野幌の森には4年振りにクマさんが! 森歩きで声掛けされたお客様に「宣伝用カード」をお渡しし会話も弾みました。 I/F

北海道ボランティア・レンジャー協議会

会報誌「エゾマツ」2023 秋季号 146

令和5年9月8日 発行

発行責任者： 会長 春日 順 雄